

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 114 年)



モディ首相とグジャラート市民から破格の歓迎を受ける安倍総理夫妻



PMINDIA ホームページより



目次

1. 安倍晋三首相の訪印.....	P. 3
(1) 安倍首相訪印に関する外務省 滝崎南部アジア部長による講演会	
(2) 安倍首相のインド訪問 一概要と成果—	
2. 第25回 ナマステ・インディア.....	P. 9
3. インドニュース (2017年9月)	P. 13
4. イベント紹介.....	P. 17
5. 新刊書紹介.....	P. 22
6. 掲示板.....	P. 23

1. 安倍晋三首相の訪印

Visit of Prime Minister Abe to India

(1) 安倍首相訪印に関する外務省 滝崎南部アジア部長による講演会

2017年9月13日～15日に安倍首相がインドを公式訪問されました。訪印に随行された外務省南部アジア部長滝崎成樹様に、10月5日（木）、国際文化会館においてインドでの訪印成果についてご講演頂きましたので、概要を以下に記載致します。

9月13日にインド・グジャラート州アーメダバードに空路到着し、その足でマハトマ・ガンディーの修行道場（サバルマティ・アシュラム）へ車で直行したが、沿道約8kmに渡って5万人以上の地元住民の盛大な歓迎を受けた。その歓迎振りは、日本の首相がインドを過去訪問した中でも最大級のものであった。

日印両政府として、「自由で開かれたインド太平洋戦略」と「アクト・イースト」の更なる融合について合意を得たことが最大の成果の一つであった。各種プロジェクトへの円借款支援（約1,900億円）、日本語教育拡充（日本語講座開設、日本語教師研修）、人的交流（オープンスカイ合意、スポーツ交流、ビザ緩和）も成果であった。北朝鮮については、圧力を最大化する必要性で一致した。

昨年のモディ首相訪日成果の最大の目玉の一つであったムンバイ・アーメダバード間高速鉄道への新幹線方式の採用決定の具体化として起工式典が行われ、両国首脳その他、関係閣僚、関係州の首相が臨席し、1万2千人程の人が集まった。また、首脳会談では第一次分として1,000億円の円借款供与に関する書簡の交換が行われた。これにより更に具体的に進展していくこととなる。また、インド国内で問題となっている在来線の安全性に関してインド国民の不安を払拭すべく、技術的支援を継続することも約束された。

経済面では、日本式ものづくり学校（スズキ、トヨタ、ダイキン、ヤマハ）開設の式典、スズキ新工場開所式、投資環境の改善など、インド政府が強く進める「メイク・イン・インド」(インド国内生産重視)との協調と支援が確認された。

今次訪印では「共同声明」にもあるように、多くの政治・安全保障、経済分野で協力強化が行われ具体的にも大きな成果が挙げたと評価できる。

次頁には、質疑応答の詳細を記載致します。



<写真：ご登壇頂いた滝崎成樹氏>

講演会での質疑応答

(質問) インドのメディアは日本に特派員も派遣しておらず、インドで日本の情報が十分に伝わっていないのではないかと？

(回答) 言葉の問題もあるかもしれない。日本情報のインドでの発信に、大使館や国際交流基金の事務所を通じて引き続き努めていきたい。今般の首脳会談で合意した日本語教育の推進も、日本情報のインドでの発信に資するものとする。

(質問) インド北東部への対応は？

(回答) 今回道路網の整備につき円借款の供与を決定したが、経済発展が遅れているこの地域の発展とアジアと東南アジアの連結性の強化の両面から、引き続き協力していきたい。

(質問) 新幹線絡みの日本側の対応は？車両担当の川重より、システム担当する JR 東日本からの出張者が圧倒的に多い。安全性に疑問を持つ在来線への改善に興味を示しているのでは？

(回答) 川崎重工と BHEL の間での協業が進んでいる。また、JR 東日本から 100 名を超える技術者が派遣され、印技術者との共同作業が行われている。在来線の安全性向上への協力については、先ほど述べたとおり。

(質問) インド企業の日本への誘致は？

(回答) 現在のところ、インド企業のみを対象とした特別なプログラムは無い。外国企業一般に対する優遇措置を利用してもらうことになる。ただし現段階では、インド国内に投資対象が豊富にあり、日本への投資よりインド国内への投資によるリターンの方が大きいとインド企業は考えているのではないかと。

(質問) インド高速鉄道事業でメイク・イン・インディアが進められているように、US-2 の技術などについても、インド国内で生産すべきか？

(回答) 一気に現地生産を想定した防衛装備品の供与は難しいと思われる。出来ることから始めていくべき。

(質問) 新幹線導入につきインド人は本当に歓迎しているのか？ガンディーは「遅くとも自分の足で歩め」と云っているのではないかと。

(回答) 少なくとも、先程紹介した今回の起工式に多数のインド人が集まったことを見る限り、インド国民は歓迎していると思う。また、沿線等で大きな反対運動が起きているという話も聞かない。

(質問) インド太平洋戦略は、中国の「一带一路」構想とバッティングするのでは？

(回答) 「一带一路」を含め、特定の国、政策に対抗しようとの考え方ではなく、日本がこれまで拠って立ってきた、そして、これからも拠って立って行く普遍的な価値、例えば、民主主義、法の支配、市場経済、航行の自由を広めていくとともに、連結性を高めることにより経済発展を実現していくという考え方である。

(2) 安倍首相のインド訪問 ―概要と成果―

外務省北米局 日米安全保障条約課 課長 有吉孝史（前 南西アジア課長）

1. はじめに

安倍首相は9月13日から15日の日程でインドを訪問したので、その概要と成果について論ずる。インドとは両首脳間で年次相互訪問が行われており、モディ首相は2014年就任後に訪日（京都・東京）し、2015年12月に安倍首相がインドを訪問（デリー・ヴァラナシ）、2016年11月にモディ首相が訪日している（東京・神戸）ので、今回がモディ首相と安倍首相の間で4度目の相互訪問となる。



<市民から歓迎を受ける安倍首相夫妻>
(引用：The Ministry of External Affairs of India)

今回の訪問ではモディ首相の要望により、グジャラート州アーメダバードを訪問した。グジャラート州はモディ首相の地元であり、またアーメダバードはマハトマ・ガンディーの活動の拠点、ムンバイ・アーメダバード高速鉄道計画の終着駅という三重の意味で重要な都市である。今回の訪問は、その内容や日程の双方の意味で二年前に続く歴史的な訪問となった。

2. 異例の歓迎ぶり

今回の訪問で何よりも強調しなければならないのは、異例の歓迎ぶりである。安倍首相は13日夕刻にアーメダバード空港に到着した際、モディ首相による出迎えを受けたが、その後、最初の訪問地であるサバルマティ・アシュラム（ガンディーの修道場）までの沿道約8km、40分間の移動に際し、約5万人の市民が沿道に出迎え、28の各州伝統舞踊が展開されるという「ロードショー」が行われた。



<サバルマティ・アシュラム訪問>
(引用：官邸ホームページ)

その後、安倍首相夫妻は、モディ首相の案内でサバルマティ・アシュラムにてガンディーの像に献花をしたほか、本年、世界文化遺産に登録されたアーメダバード歴史都市にあるモスクを訪問した。初日はモディ首相と安倍首相夫妻のみの非公式夕食会で締めくくり、モディ首相の暖かい歓迎と両首脳の親密ぶりを改めて内外に示した。

3. ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道起工式典

今回の安倍首相の印訪問の最大の成果は、ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道計画の着実な進展である。14日午前、高速鉄道の終着駅サバルマティ付近の運動場で、「ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道事業に係る起工式典」が開催された。同式典には両首脳に加え、ゴヤル鉄道大臣、ルパニ・グジャラート州首相、ファドナヴィス・マハラシュトラ州首相をはじめ高速鉄道関係者が一同に臨席し、高速鉄道研修施設の起工、記念碑除幕式等が行われた。また、同日の首脳会談後には、最初の円借款として1000億円の円借款に関する書簡の交換が行われた。

この式典の様子はインド全土にも中継された。印象的なのは、安倍首相、モディ首相それぞれが大勢の群衆が見守る前で、日印協力の重要性について熱い思いを述べたことである。安倍首相のスピーチについ

ては、首相官邸ホームページ¹に掲載されているので詳細に立ち入らないが、日本が新幹線を契機として高度成長を遂げた経験を踏まえ、日本はモディ首相の取り組みに官民をあげて協力をする決意を改めて示すとともに、日本とインドという二大民主主義国が守るべき価値をインド太平洋に広げ、相互の成長に拍車をかけていくことを強調した。

続くモディ首相は 30 分に及ぶスピーチを行った。インドが真に成長し先進国となるためには、高速鉄道をはじめ先進国に相応しいインフラ投資を進めることが必要であること、そのために極めて譲許性の高い日本の円借款を含め日本との協力が極めて重要であることを強調し、モディ首相の強い決意を国民に訴えるものであった。



<ムンバイ・アーメダバード高速鉄道起工式典>
(引用: The Ministry of External Affairs of India)

4. ダンディ・クティール訪問

両首脳は高速鉄道起工式典の後、ガンディナガルに移動し、ガンディー博物館であるダンディ・クティールを短時間訪問した。ガンディーは英国による塩の専売に反対し、1930年に、380km に及ぶ「塩の行進」を行ったが、同博物館はこのようなガンディーの取り組みを記念するものがある。短時間でも是非訪問してほしいというモディ首相の要望が実現した。



<ダンディ・クティール訪問>
(引用: 官邸ホームページ)

5. 日印首脳会談

14 日昼、安倍首相とモディ首相は両首脳間で 10 回目となる首脳会談をガンディナガルにあるマハトマ・マンディール国際会議場で行った。両首脳の会談の成果は会談概要や日印共同声明にとりまとめられている²が、主な点は次のとおりである。

第一は、我が国が進める「自由で開かれたインド太平洋戦略」と「アクト・イースト」の更なる融合である。具体的に両首脳は、自由、民主主義、人権、法の支配、紛争の平和的解決といった基本的価値を擁護するとともに、インド国内及びアフリカを含むインド太平洋地域のその他の国との連結性強化のために協働するという力強いコミットメントを表明（共同声明パラ 10）した。両国は南アジアから東南アジアや中東・アフリカを結ぶ日印協力を推進することを確認し、特に、印北東部への包括的支援を調整するため両政府間でアクト・イースト・フォーラムを設置することを表明した。



<日印首脳会談>
(引用: 官邸ホームページ)

第二は、安全保障面での協力の確認である。マラバールが本年 7 月、日印米共同訓練として初めて実施されたことに示されたように、日印米の連携を強化する決意が示された。また、防衛装備協力では、陸上

第二は、安全保障面での協力の確認である。マラバールが本年 7 月、日印米共同訓練として初めて実施されたことに示されたように、日印米の連携を強化する決意が示された。また、防衛装備協力では、陸上

¹ http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement/2017/0914india.html

² <http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000290053.pdf>

無人車両・ロボティクス研究協力協議開始することや印による海難救難艇（US-2）の調達についても協議を継続することが確認された。

第三は、着実な円借款の実施である。先に述べた高速鉄道に関する円借款に加えて、グジャラート州におけるシップリサイクル施設の改善計 5 件 1900 億円の円借款の交換公文が署名された。

第四は、日本語教育の拡充である。安倍首相は本年 6 月、国際交流会議「アジアの未来」で、「アジアの各地で 3 か所くらい拠点を選び、日本語の先生を育てる場所を設けます。」と述べたが、インドはその拠点の一つとなった。本件については、モディ首相から高い関心が示され、今後、日印両国がインド 100 高等教育機関での日本語講座開設、1000 人の日本語教師研修の推進に取り組むことを公表した。

第五に、観光・人的交流の抜本的拡大である。日印間でオープンスカイに関する合意が設けられたほか、スポーツ交流、映画交流、ビザ緩和等の推進につき確認された。

6. ビジネス全体会合

14 日午後、昼食会に続きマハトマ・マンディールにて、ビジネス全体会合が開催された。経団連とインド工業連盟（CII）が参加するビジネス・リーダーズ・フォーラムによる提言の手交、JETRO 主催日・インド経済フォーラムの首脳セッション、スズキ・グジャラート工場開所式、「日本式ものづくり学校開所式」、「ヴァラナシ会議場デザイン発表」など多くの行事が行われた。

安倍首相は同会合のスピーチにおいて、日印経済の基本的考え方を次のとおり述べている。

「日印関係は世界で最も可能性を秘めた 2 国間関係である。強いインドは日本のためになる。強い日本はインドのためになる。そしてこう述べる時、何よりも大事なものは経済力。経済力は国力の源泉です。私とモディ首相は確信しています。日本の高い技術とインドの豊富な優秀な人材が協力すれば、日印を起点に世界を相手にしたものづくりができる」³。会合では、かかる考え方に基づく多くの成果がまとまった。

1) スズキ・グジャラート工場開所式

両首脳と鈴木修スズキ会長の出席のもとスズキ・グジャラート工場開所式が行われた。スズキは現在、インドにおいて年間 150 万台を生産しているが、グジャラート新工場は現在 25 万台、将来 75 万台の生産を視野に入れる。同工場は、モディ首相がグジャラート州首相時代から取り組んできた案件であり、開所の暁には式典には必ず参加するとの約束をしていた由だが、それが実現した。また、スズキはインドでのハイブリッド自動車の生産を視野に、東芝、デンソーと共同でリチウム電池工場を建設することを改めて紹介した。インドは、CO2 排出量の削減、大気汚染への対応のために大胆な電気自動車・ハイブリッド車への転換政策を進めているが、スズキのハイブリッド自動車推進、「メイク・イン・インディア」推進への強い決意が示された。



<スズキ開所式>
(引用 : <https://www.narendramodi.in/>)

³ http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement/2017/0914india02.html

2) 「日本式ものづくり学校」開所式

スズキ、トヨタ、ダイキン、ヤマハの4社が「日本式ものづくり学校」をインド国内に開設したことを祝う式典が行われた。日本企業はインドでの生産拡大を目指しているが、新規工場の開設のためには現場を統括する班長等を担う人材が多数必要となる。責任有る企業行動（CSR）の予算を活用し、インドの若者に日本式ものづくり学校を設けるもので、インドの人材育成に力を入れるモディ首相の関心とも合致する事業である。今後、日立建機、豊田通商による開校も予定されており、日印ものづくり新時代を示す取り組みである。

3) ビジネス環境の改善、観光促進等

モディ首相、ルパニ・グジャラート州首相も投資環境の改善に熱心である。今回、両国の投資促進ロードマップの発表、ビジネス・リーダーズ・フォーラム報告書提出、グジャラート州政府と日系企業15社の覚書等が行われた。日本企業をさらに誘致して産業集積をすすめ、メイク・イン・インドを更に進めたいとのインド側の高い関心が示された。

4) 対日観光促進

人と人とのつながりは重要である。インドから日本への旅行者は5年で倍増し、昨年には12万人となったが、さらに観光客を増やすべく訪日観光ブースを設けて日本の魅力を発信した。安倍首相はスピーチにおいて、「日本にはインドに起源を持つ寺社仏閣から数学、ITを活用した最新テクノロジーがあり、多くのインドファンもいます。また、自然も四季折々に見せる姿を変化させます。また、おいしいインド料理屋もたくさんあります。インドの皆さんのお越しを、国を挙げて歓迎いたします。」と述べた。今後、さらなる訪日観光の拡大を期待する。

7. 最後に

以上のとおり、今回の安倍首相のインド訪問は非常に充実するものとなった。その意義は、安倍首相自身が経済関係行事の際のスピーチで自らの言葉で総括しているので、そのまま紹介したい。

「60年前に日本の首相大臣として貴国を初めて訪問したのは、私の祖父の岸信介であります。その際、ネルー首相と祖父は首脳会談を行い、そして首相官邸の前に集まった数万人の人々に対して祖父を紹介してくれました。当時日本はまだそれほど豊かではなかった。そしてその敗戦国の首相を、当時ネルー首相は、私が最も尊敬する国日本の首相だと紹介してくれました。そのとき祖父は感激し、自分は生涯インドの友人でありたいと、こう心に誓ったそうであります。

昨日私がグジャラートにやって来たとき、約5万人の方々が街頭に出て私たちを歓迎していただきました。私も本当に、妻も感激しました。そして私たちも、生涯グジャラートのそしてインドの友人であろうと、こう心に誓いました。

私とモディ首相は今回10回目の首脳会談を行いました。これからも回数を重ねてまいります。そして友情を更に深めていきたいと思えます。深い友情で結ばれ、共に繁栄の未来を進もうとする日本とインド、ここに集われた皆様は、両国関係の歴史に新たな一ページをつづる方々です。今日この日が日本、インド、そして皆様を一層結びつける機会となることを心より願います。」

2. 第25回 ナマステ・インド

Namaste India 2017

日本最大級のインド・フェスティバル「ナマステ・インド」は今年で25回目を迎え、9月23日（土）、24日（日）に東京の代々木公園イベント広場にて開催されました。今年の日印文化協定発効60周年にあたり、日印交流記念事業としてナマステ・インドも華をそえました。

23日は前日から続く雨が懸念される中、当日の朝にはピタリと雨が止み、過ごしやすい天候のもと開会式が開かれました。式では、駐日インド大使 スジャン・R・チノイ閣下、公益財団法人 日印協会平林理事長、NPO 法人日印交流を盛り上げる会 長谷川理事長がご挨拶され、インド政府 ICCR 派遣のラダック舞踊団が民族音楽、舞踊を披露しました。野外ステージでは29の団体、グループによる様々なプログラムが夕方まで催されました。

24日は晴天で気持ちの良い天気となり、31の団体、グループのパフォーマンスが催され、 Bollywoodダンス、インド古典舞踊、ヨガレクチャー、北インド古典音楽と多岐に渡り、インド人演歌歌手のチャダさんも演歌を披露し、大変に盛り上がりました。チャダさんと共に、10月に上演される歌舞伎「極付印度伝 マハーバーラタ戦記」に百合守良王子（ゆりしゅらおうじ）としてご出演される坂東彦三郎氏が登場し、歌舞伎の見得を披露しました。両日とも出演したインド政府 ICCR 派遣のラダック舞踊団は、躍動感あふれるドラムと笛の音色で観客を魅了し、ラダック地方独特の衣装とステップで会場を盛り上げました。一方、宮城県女川町では東京に先立ち、5月4日に「ナマステ・インド in 女川町」が開催されました。

両日とも50以上の飲食ブース、20以上の販売ブースが軒を連ね、インド・ビールやワイン、様々なインド料理に舌鼓を打ちながらステージを見たり、ショッピングを楽しむ方で賑わいました。



<写真①：開会式での点灯の様子
左から、チノイ大使、平林理事長、
長谷川理事長>



<写真②：開会式でラダック舞踊団と>



<写真③、④：ナマステ・インド2017、会場の様子。写真右：日が沈んだ後も賑やかな会場>



<写真⑤、⑥：会場で展示販売しているオートリキシャ。記念撮影もできます♪写真 右：ラダック舞踊団のパフォーマンス>

日印協会主催 講演会 於 エア・インディアセミナーハウス

日印協会は開催期間中、2 日間に渡り講演会を開催しました。多くの来場者が熱心に受講されました。講演会の内容は以下の通りです。

9月23日(土)

①13:00～14:00

演題「奥深きインド—魅惑的な世界遺産—」 講師：平林博

②14:30～15:30

演題「日本の絵本の読み聞かせキャラバンで“クリーン・インディア”に貢献！」

講師：古賀義章

9月24日(日)

①13:00～14:00

演題「インド工科大学の学生たちと訪ねるインド神話の世界」 講師：山田真美

②14:30～15:30

演題「ナンダ・コト初登頂 80 周年記念事業—只今、ベースキャンプにいます
～81 年目のインド遠征隊～ 『インドの聖峰ナンダ・コト』上映会 (1936 年撮影、30 分)

講師：上遠野健一

<演題1：「奥深きインド—魅惑的な世界遺産—」>

講師：平林博（公益財団法人 日印協会理事長）

歴代最長の駐印大使を務め、歴史、世界遺産マニアの日印協会 平林理事長が贈る、「奥深きインド」。日本とインドの精神的つながりを示す（ヒンドゥー教三大神と妃神、ブラフマ神やサラスワティ妃神、シヴァ神やパールヴァティ妃神など）日本に伝えられたヒンドゥー教の神々。多様な宗教のシンボルとなる遺産をめぐる。さらに、北から南のインド全土に渡る 51 の世界遺産の中から、厳選した世界遺産の旅を写真たっぷり、うんちくたっぷりでご来場のみなさまに楽しんで頂きました。



<演題2：「日本の絵本の読み聞かせキャラバンで“クリーン・インディア”に貢献！」>

講師：古賀義章（講談社 海外事業戦略部 担当部長）

インドで大ヒットしたインド版「巨人の星」プロデューサー、講談社の古賀義章氏に今年もご登壇いただきました。

1986年、まだ大気汚染も深刻ではなかったインドを訪れ、その独特の存在に魅了された古賀氏は、その後雑誌の制作に関わりながら報道の現場でキャリアを重ねてこられました。しかし、人生の岐路に立ち、どうしてもインドの魅力が頭を離れることはありませんでした。その想いを達成すべく、ついにインドとの関わりを築く第一歩であるインド版「巨人の星」の制作をプロデューサーとしてバックアップしました。そんな古賀氏が今手掛けているのは、インドでの出版のライセンス契約。出版社の収益の多くは実はライセンス契約が占めています。特に日本の出版社にとって海外でのマンガ・アニメのライセンス契約は重要な収益源となつて



<ヒンディー語の『もったいないおばあさん』表紙>

なっています。しかしインドでは、親が子どもの娯楽のためにお金を使うことはありません。そこで古賀氏は、子どもへの教育効果が見込め、インドの社会にも貢献できる、インドと日本にとってウィンウィン関係を築くことのできる出版ビジネスを考えだしました。それは、日本の『もったいないおばあさん』という絵本をインドで英語・ヒンディー語で出版するということ。古賀氏は、ゴミが分別されることも、燃やされることもなくただ放置されているだけの、巨大な丘のようになったゴミ集積所や、ゴミで埋め尽くされた川を目の当たりにし、インドのゴミ事情に大きな問題があると感じました。そこで、子どもたちから変えていこう。そんな思いで『もったいないおばあさん』の絵本の読み聞かせキャラバンを展開し、インド各地をまわりました。インドの問題とそれに立ち向かうビジネスモデルを創り出す古賀氏の世界観溢れるセミナーでした。

<演題3：「インド工科大学の学生たちと訪ねるインド神話の世界」>

講師：山田真美（作家/博士 人文科学/公益財団法人 日印協会理事/インド工科大学：IIT ハイデラバード校 教養学部客員准教授）

インドトップクラスの頭脳を育てる IIT のハイデラバード校で客員准教授をつとめる山田真美氏と共に、インド神話の世界を面白可笑しく巡りました。

大学生の時に日本を訪れたインドの国会議員に、「あなたはインドへ来るために生まれた人ですよ」と言われ、山田氏のインドへと続く運命は動き出します。マサチューセッツ工科大学を凌ぐといわれる IIT では文系教育も重視されており、IIT で価値のある講義が出来る人物がいれば来て欲しい、ということで山田真美氏が選ばれました。渡印までのプロセスはインドらしく難航しましたが、「日本におけるインドの神々」という集中講義が 2015 年について開講しました。初年たった 7 人だった受講生が学生の間で講義が面白いと口コミが広がり、翌年には 164 人になりました。今回のセミナーでは、IIT ハイデラバード校のあるハイデラ



バード近郊にある珍しいお寺を、神話を織り交ぜながら巡りました。ハイデラバード近郊に建てられた「スレンドラブリ」は、インド神話の世界をディズニーランドばり(?)に再現した、新しいテーマパークです。シヴァ神の世界創造も巨大オブジェで表現され、驚きのスケールに圧倒されます。そして、インドではタブーのはずのお酒が許されるお寺。これは、黒い犬に乗るシヴァ神の最も恐ろしい姿であるヴァイラーヴァを祀ったお寺。なぜこのお寺でお酒が捧げられるのかというと、ヴァイラーヴァの好物がお酒だからです。インドではタブーとさ

れるものが神さまの好物というのも、インド神話の驚きの世界です。様々な神話の世界を、たくさんの写真と楽しく興味深いお話しと共に巡る素晴らしいセミナーとなりました。

<演題4:「ナンダ・コート初登頂80周年記念事業—只今ベースキャンプにいます81年目のインド遠征隊—」>

講師：上遠野健一（毎日映画社）

1936年（昭和11年）に立教大学の山岳部がナンダ・コートへ初登頂を果して80年を記念して、大蔵喜福と立教大学OBで構成される遠征隊が再びあの頂をめざします。今回は、1936年当時撮影された遠征隊の記録映画を上映し、当時の登山の困難さや、80周年記念事業としてのナンダ・コート遠征までの道のりを、今プロジェクトを陰で支える毎日映画社の上遠野（かとうの）健一氏にお話しいただきました。

1936年、登頂の際に撮影されたフィルムは鬼気迫る登山の様子だけでなく、当時のインドの風景や、現地人シェルパ（登山の荷物持ち）の様子や彼らと遠征隊との交流、そしてジプシーが芸を披露する場面など、文化人類学的にも貴重と思われる映像も入っており、多くの方が足を止め興味深そうに鑑賞しました。最新鋭の機材が容易に手に入る今日と違い、当時は全てが手さぐりで、登山用の服やピッケルも特注のものを全て国産で用意するなど、未知の世界へ飛び込んでゆく姿が、お話しから想像することができました。当時、日本は2・26事件の後、翌年には日中戦争に突入していこうという空気が感じられるただ中。この登頂後に太平洋戦争で戦死したメンバーの話からは、このフィルムがただの記録以上の意味を持つ事が分ります。彼らが頂上にピッケルと共に埋めた日章旗、立教大学校旗を探す遠征隊は、セミナー当日には10月上旬の登頂を目指し、ナンダ姫の足下に陣営を張っていたはずで



（本文、写真：日印協会 主務 玉岡善美、写真③～⑥提供：ナマステ・インディア Facebook ページ）

3. インドニュース (2017 年 9 月)

News from India

1. 内政

【内閣改造】

9月3日

- モディ政権の内閣改造に伴い、新たな閣僚・閣外相の宣誓式が行われた。

メモ：新閣僚・閣外大臣の顔ぶれ

1. 新閣僚

- (1) ニルマラ・シタラマン国防大臣（商工大臣（専管）から所掌替え、閣内入り）
- (2) ピューシュ・ゴヤル鉄道大臣（電力大臣（専管）から所掌替え。石炭大臣も引き続き所掌）
- (3) スレーシュ・プラブー商工大臣（鉄道大臣から所掌替え）
- (4) ダルメンドラ・プラダン石油・天然ガス大臣兼技能開発・起業促進大臣（石油・天然ガス担当大臣（専管）からの閣内入り、所掌追加）
- (5) ムクタル・アッバス・ナクビ少数者大臣（少数者担当大臣（専管）からの閣内入り）

2. 新閣外大臣（専管）

- (1) ラージ・クマール・シン電力担当兼新エネルギー・再生可能エネルギー担当大臣
- (2) ハルディーブ・シン・プリ住宅・都市問題担当大臣
- (3) アルフォンス・カンナンタナム観光担当兼電子・IT担当大臣

3. 新閣外大臣（その他）

- (1) シヴ・プラターブ・シュクラ財務担当閣外大臣
- (2) アシュウィニ・クマール・チョベイ保健・家庭福祉担当閣外大臣
- (3) ヴィレンドラ・クマール女性・児童育成担当兼少数者担当閣外大臣
- (4) アナントクマール・ヘグデ技能開発・起業促進担当閣外大臣
- (5) ガジェンドラ・シン・シェカーワト農業・農民福祉担当閣外大臣
- (6) サッティヤ・パル・シン人的資源開発担当兼水資源・河川開発・ガンジス川再生担当閣外大臣

【連邦政府・連邦議会】

9月21日

- シン内相は、全国人権委員会主催セミナーにおいて、「難民認定を受けるには適正な手続をとる必要があるが、彼ら（ロヒンギャ）はいずれもその手続をとっていない」、「不法移民と難民を混同すべきでない。いかなる主権国家も不法移民に対応している。この問題は国家の安全にも関係している」等述べ、ロヒンギャは、不法な移民であり、難民ではないとの認識を示した。

9月30日

- コヴィンド大統領は、下記の通り5名の州知事と1名の準州知事を指名した。
 - ・B.Dミシュラ・アルナチャル・プラデシュ（AR）州知事
 - ・サティヤ・パル・マリク・ビハール州（BR）知事
 - ・バンワリラール・プロヒト・タミル・ナド（TN）州知事
 - ・ジャグディーシュ・ムキー・アッサム（AS）州知事
 - ・ガンガー・プラサード・メガラヤ（ML）州知事
 - ・ディヴェンドラ・クマール・ジョシ・アンダマン・ニコバル諸島（AN）準州知事

【地域政党・地域情勢】

(ウッタル・プラデーシュ (UP) 州)

9月8日

- アディティヤナートUP州首相は、同州議会上院選挙において無競争で当選した。また、マウルヤ副州首相、シャルマ副州首相等も同様に当選した。

(ジャンム・カシミール (JK) 州)

9月16日-17日

- マンモハン・シン元首相率いる kongress 党のハイレベル・ポリシー・グループが、カシミール問題に関する協議のためJK州を訪問し、オマル・アブドゥッラーJK民族評議会党首等と面会した。

(タミル・ナードゥ (TN) 州)

9月25日

- TN州政府は、ジャヤラリタ前州首相の死亡に関する調査委員会を設置することを発表した。

2. 経済

【ハイテク都市ランキング】

9月10日

- 世界経済フォーラムは豪調査会社によって行われた世界のハイテク都市ランキングにて、世界 85 都市のなかでベンガルールが 19 位にランクインしたと発表。ベンガルールは、深セン、ベルリン、香港、コペンハーゲン、バルセロナ、ワシントン DC 等の大都市よりも上位にランクインしている。

【スブラマニアン主席経済顧問の任期】

9月23日

- ジャイトリー財務大臣はインド政府が、アルヴィンド・スブラマニアン主席経済顧問 (Chief Economic Advisor : CEA) の任期を1年延長し、2018年10月16日までとすると発言した。

【農村地域等の電化に係る新たな支援策】

9月25日

- モディ首相は、農村地域等の電化に係る新たな支援策を発表。モディ首相は、インドの電気を望む全ての家庭への電力供給を保証する新たなスキームを開始した。事業規模は1,632億ルピー (うち予算支援 (Gross Budgetary Support) は1,232億ルピー) であり、農村向けは1,403億ルピー、都市部向けは229億ルピーとなっている。

3. 外交

【BRICS 首脳会合】

9月3日-5日

- モディ首相は訪中し、厦門で開催された第9回 BRICS 首脳会合に出席した。また、同会合のサイドラインで、モディ首相は、習近平国家主席、プーチン・ロシア大統領、テメル・ブラジル大統領及びエルシーシ・エジプト大統領と会談した。

【印・ミャンマー関係】

9月5日-7日

- モディ首相はミャンマーを訪問し、首都ネーピードーでティン・チョウ・ミャンマー大統領を表敬したほか、アウン・サン・スー・チー国家最高顧問と代表団レベル協議を行った後、合意文書の署名及び印ミャンマー共同声明が発出された。また、モディ首相はヤンゴンを訪問し、インド人コミュニティに対してスピーチを行った。

【印・ロシア関係】

9月5日-7日

- スワラージ外相はロシアを訪問し、ウラジオストクで実施された東方経済フォーラムに出席し開会式でスピーチを行ったほか、トルトネフ副首相兼極東連邦管区大統領全権代表及び同地区知事、ラヴロフ・ロシア外

務大臣及びドンスコイ天然資源環境大臣と会談した。

【印・スリランカ関係】

9月8日－10日

- マーラパナ・スリランカ外務大臣が訪印し、スワラージ外相と代表団レベル協議を行ったほか、モディ首相を表敬した。

【印・アフガニスタン関係】

9月10日－12日

- ラバニ・アフガニスタン外務大臣が訪印し、スワラージ外相と共同議長を務めた第2回戦略的パートナーシップ理事会が実施された後、合意文書の署名及び共同声明が発出された。また訪印中、ラバニ外務大臣はモディ首相を表敬した。

【印・米国関係】

9月19日－25日

- 第72回国連総会に出席するため、スワラージ外相が訪米し、23日、一般討論演説を行った。また、国連総会のサイドラインで、日米印外相会合、パレスチナに関する非同盟運動諸国（NAM）外相会合、第3回印カリブ共同体（CARICOM）外相会合、G4外相会合、SCO外相会合、BRICS外相会合、SAARC外相会合が行われた。

9月26日－27日

- マティス米国防長官が訪印し、シタラマン国防大臣と会談しプレス向け声明が発出されたほか、モディ首相を表敬した。

4. 日印関係

【安倍首相の訪印】

9月13日－15日

- アーメダバードを訪問した安倍首相は、14日、モディ首相との間で首脳会談を行い、共同声明を発表した。また安倍首相は、ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道事業に係る起工式典や日インド・ビジネス全体会合等に出席した。（日印首脳会談概要については「今月の注目点」参照）

【日米印外相会合】

9月19日

- 米国ニューヨークにおいて日米印外相会合が開催された。今次会合には、我が国から河野外務大臣、米国からティラソン國務長官、インドからスワラージ外務大臣がそれぞれ出席した。
- 今回の会合では主に、北朝鮮情勢、海洋安全保障及び地域連結性について議論が行われた。

(1) 北朝鮮

北朝鮮については、度重なるミサイル発射実験や核実験について深刻な懸念と最大限の非難が共有されるとともに、新たな安保理決議第2375号を含む関連決議の完全な履行、制裁の「抜け穴」防止に向けた取り組みの重要性を確認し、日米印を含む国際社会全体で、北朝鮮に対して従来にない新たな段階の圧力をかけていくことで一致した。

(2) 海洋安全保障・地域連結性

また日米印外相は、自由で開かれたインド太平洋の実現に向けて、海洋安全保障や地域連結性強化の分野において、協力を強化していくことで完全に一致した。航行の自由や法の支配等の基本的価値の普及・定着、地域の連結性強化等による繁栄の確保、さらに本年7月の日米印マラバール演習に代表される海洋安全保障分野での協力を、今後より一層具体化すべく、3か国で緊密な連携をはかっていく。

3か国の外相は今般の有意義な意見交換を歓迎し、今後も3か国間の対話を強化・継続していくことで一致した。

メモ：日米印外相会合の意義

本会合は2015年に続き2回目となる外相会合であり、日米の外相交代後初めて3か国の外相が一堂に会する機会となった。日米印の3か国は、自由、民主主義、法の支配といった基本的価値と戦略的利益を共有する、インド太平洋におけるパートナーである。日米印で地域情勢や安全保障に関する共通の関心事項について率直に意見交換を行い、協力を強化することは、3か国の戦略的なパートナーシップを一層深めるとともに、インド太平洋地域の安定と繁栄にとって極めて重要な意義を有する。

今月の注目点：日印首脳会談概要（外務省HPより抜粋）

1. 冒頭

安倍首相から、今回の日印首脳会談は通算10回目、強いインドは日本のためになり、強い日本はインドのためになる、日印関係は世界で最も可能性を秘めた二国間関係であり、モディ首相と共にその潜在力を全面的に開花させ、インド太平洋地域と世界の平和と繁栄を主導していきたい旨述べた。

これに対し、モディ首相から、安倍首相を自分の地元グジャラート州にお迎えすることができ大変嬉しい、「アクト・イースト」と「自由で開かれたインド太平洋戦略」を一層連携させるとの考えを支持する旨述べた。

2. 連結性

安倍首相から、連結性強化のための日印協力は戦略的に重要、東南アジアから、アフリカに至るまで、具体的案件の形成を加速したい、インド北東部において、インフラ整備や人的交流を中心とする包括的支援を実施したい旨述べた。

モディ首相から、日印による連結性の強化は、インド太平洋地域の更なる発展のためにも重要、ASEAN諸国やアフリカを始め、日本と具体的協力を推進したい旨述べた。

3. 地域情勢（北朝鮮）

安倍首相とモディ首相は、日印両国は北朝鮮問題について断固たる対応を取ることに、また先日採択された安保理決議を国際社会全体でしっかりと履行し、北朝鮮の政策を変えさせなければならないということと共に世界に訴えたいとの考えについて完全に一致した。

4. 高速鉄道起工式典

安倍首相から、先程の素晴らしいインド高速鉄道起工式典に感謝、研修施設の着工や1,000億円の円借款供与等着実に成果を挙げている、メイク・イン・インディアを官民挙げて進めたい、川崎重工とBHELの協業を歓迎、インドの在来線の安全に貢献すべく、専門家派遣、鉄道安全セミナー等により協力を進めたい旨述べた。

モディ首相から、高速鉄道実現に国民や海外の関心も高く、日本との協力を是非成功させたい、インド人に夢を与えて、国民が一致して取り組むことが重要、改めて早期の開業に向けてあらゆる努力をしたい旨述べた。

5. 政治・安全保障

安倍首相から、陸上無人車両・ロボティクス分野等の研究協力に向けた協議の開始を機に、今後の防衛装備・技術協力の進展を期待、US-2に係る協力については早期具体的進展を期待、マラバールが日印米共同訓練として初めて実施されたことを歓迎。陸空も含め全ての軍種で協力を拡大したい旨述べた。

モディ首相から、防衛装備の協力やマラバール訓練をはじめ、共同訓練が強化されていることを歓迎、US-2については両国間の協議を続けたい、日米印や日印豪などの有志国との連携が重要であり進めたい旨述べた。

6. 経済・経済協力

安倍首相から、日印双方の強みを活かして投資・人材の基盤を強化し、メイク・イン・インディアを推し進め、インドから世界へ輸出したい、投資促進ロードマップや経産省とグジャラート州の合意を歓迎、日本式ものづくり学校について、スズキ、トヨタ、ダイキン、ヤマハの4校、寄附講座1講座を今夏に開始、日印友好の

証しヴァラナシ国際会議場を両国民に本日示すことができ嬉しい旨述べた。

モディ首相から、日本企業の投資・進出、メイク・イン・インドへの貢献、投資促進ロードマップを歓迎、環境対策を進めることを重視しており、電気自動車や太陽光発電の分野を始め、日本との協力を更に勧めたい、シッパーサイクルヤードに対する日本の支援を感謝、日印友好の証しヴァラナシ国際会議場への支援決定に感謝する旨述べた。

7. 人材育成

安倍首相から、本年の日印友好交流年から2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、観光分野等の人的交流を抜本的に拡大したい、オープンスカイ合意、スポーツ交流を歓迎、映画交流も活発化させたい、更なるビザ緩和も今後実施する旨述べた。また、インドでの日本語教育強化はビジネスや人的交流の裾野を広げるもの、100の教育機関で日本語講座が開設されることを前提に、1,000人の日本語教師の研修を実施したい旨述べた。

モディ首相から、人的交流に向けた日本側の様々な取組を歓迎、人的交流分野の潜在性は大きく、日本のイニシアティブは両国の友好関係の促進に資するもの、JNTOのデリーオフィスの開設を歓迎、インドでの日本語教育強化の重要性を理解、日本と連携して進めていきたい旨述べた。

4. イベント紹介 Japan-India Events

=◇ 最近のイベント ◇=

◆ インドセミナー『失敗しないインドの物品・サービス税（GST）対策』が催されました

9月13日（水）横浜インドセンター主催による標記セミナーが開催されました。

複雑なインドの税システムは日本人にとって頭痛の種であったが、現政権の英断により従来の物品税、州VAT、中央販売税、サービス税などの間接税を統合して、物品・サービス税（GST：Goods & Services Tax）が2017年7月1日に施行された。複雑な多くの税システムをGSTに一本化したことは理論的にはまことに有意義であり、税の簡易化を図る上で大きな進展であったと期待できる。インド国内のみならず外国企業にとっても税会計管理上、簡便になると推察される。

基本的にGSTとは、『供給』（Supply）が発生した時に課税される。『供給』とは、販売、譲渡、交換、ライセンス、賃貸、処分、サービス等広い範囲に及び、納税地は『供給』が成された場所とされる。税率は、無税の基本食料品（穀物、パン、牛乳など）を含め5段階（0%、5%、12%、18%、28%）に分類され、物品とサービスがミックスされる場合には内容によって組み合わせで決められる。GSTは基本的に州内取引であるCGSTとSGST（Cは中央政府、Sは州政府取分）、州をまたいだ取引IGSTの3種類に分割される。其々の税金に控除（仕入税額控除）の適応がある。特徴的なのが、全ての税申告がオンラインで行われることである。今までの複雑な税システムに対して、相当に簡素化・シンプル化された制度と云えそうだ。

その反面で、次のような課題が提起されているのが現実である。未だGSTシステムは完結しておらず、毎月のようにGST運営委員会が開催され、特に税率については都度変更されている。また、実務上判断に困難な問題が生じており、收拾が乱れているようだ。仕入税額控除の制度があり、事務処理量が膨大化していく恐れがある。このような問題を含んでいるために、GSTへの移行が今一つ進んでいないのが現状のようで、税務管理者による厳密な調査の上、対応すべきとの印象である。

（本文：日印協会 常務理事 笹田勝義）

◆ 2017 Study of India 第1回 『インド服のTPOセミナー』が開催されました

9月19日(水)、在日インド商工協会(ICIJ)ホールにてICIJ、横浜インドセンター共催のインド服のTPOセミナーが開催されました。講師は南インド、タミル・ナードゥ州ご出身のヘマラタ・アナンドさん。清泉女史大学非常勤講師を務めている彼女は、ボランティアで川崎と横浜の子どもたちにインド文化を教えたり、NHK教育テレビの児童向け番組でもインド文化を紹介しています。

セミナーでは、地域、宗教などによっても違う奥深いインドの服飾を、インドの歴史的、文化的背景と関連付けながら紹介。お葬式や結婚式、ビジネスなど、どの様な時に何を、どうやって(特にサリー)着るのかの丁寧な説明がありました。ペルシアやアラブ、イギリスの文化が互いに影響し合い、インド文化へと定着した姿が現在のインドの服飾であることや、たった1枚の長方形の布(サリー)に80種もの巻き方があることは、インド文化の奥深さを物語っていると改めて感じました。

(本文：日印協会 主務 玉岡善美)



<インドの様々な衣装。wikipedia より>

◆ 北西インドルーラル芸術団 Sangeet Car 公演が開催されました

9月21日(木)の午後、駐日インド大使館およびミティラー美術館の働きかけで標記公演が銀座の泰明小学校で開催されました。今回の芸術団は2チームで構成され、一つはモディ首相とチノイ駐日インド大使の故郷であるグジャラート州南部砂漠地帯ジャムナガルからガルバダンディーヤと、二つ目はラジャスタン州西部パキスタン国境に近いジャイサルメールよりさらに国境よりのオアシスから、少数部族マナガニヤ部族の民俗音楽です。



ラジャスタン・マナガニヤ部族音楽は、全体的に哀愁に満ちた語りをメロディーに載せて歌い上げますが、プロデューサーAyesha Vasdevさんが作成してくれた訳によると「きょうサソリに刺されて大変だったんだ」「乗って戦場に遠征した馬が疲れてしまい、女たちが心配している」といった日常的な夫婦の会話が主体であることがわかり、ある意味滑稽な感さえあります。聴いてくれた児童たちは、エキゾチックな雰囲気は感じ取ってくれたとは思いますが、果たして本当の意味は感じ取ってくれたでしょうか。



ガルバダンディーヤはガルバというフォークダンスで、ドゥルガ神の象徴であるダンディーヤというスティックを両手に持って打ち鳴らしながら踊りますが、収穫を祝い櫓の周りを輪になって踊る盆踊りと似ています。その飛び跳ねる動きは派手で、 Bollywoodダンスにも取り入れられています。

パフォーマンスの最後には、児童生徒のみなさんも一緒になって踊り、大いに盛り上がりました。

◆ レー・ラダック地方伝統芸能公演が開催されました

9月26日(火)、インド大使館VCC講堂にてインド政府ICCR派遣、レー・ラダック地方の舞踊団(NACS:北部芸能文化協会)による公演が催されました。ラダックはインドのジャンム・カシミール州東部の地方の呼称で、かつてはラダック王国という独立した仏教国でした。ラダックはチベット文化圏に属し、チベット仏教の中心地の一つとして有名です。降水量は少なく乾燥しており、一年のうち夏の期間が3カ月しかなく、残りは長い冬となります。その、荒涼とした厳しい大地でラダックの人々は農業を中心とした生活を営んでいます。今回来日した舞踊団は東京にあるインド大使館の他、新潟や宮城など日本全国を回りパフォーマンスをし披露しました。ここでは、インド大使館で行われた公演の様をお伝え致します。



レー・ラダック地方は季節の多くを雪で閉ざされた地域であり、春を象徴するものは神聖で大切なものです。花や鳥は特別な意味を持ち、花は神への捧げものとして、鳥は群を成して飛んでいく様子を表現し、春の到来を祝います。その様子は、リズムカルで華やかなものでした。実際にニマギャンナム王の宮廷で踊られていた、不老不死の薬を入れた壺を頭に寄せ王へ捧げる宮廷舞踊では、頭に寄せた壺に実際になみなみと水が入っており、踊りがダイナミックになるにつれ水がこぼれ落ち、臨場感のある演出を楽しむことができました。

男女共に、伝統的で特徴のある衣装をまとっています。男性はウールのジャケットにシルバーやゴールド、ターコイズを豪華にあしらったタンガと呼ばれるネックレスを身に付け、腰にはベルトを巻いています。このベルトには大切な役割があり、紐をほどくのに使うノットや、裁縫道具、野生の動物を追い払うのに使うスリングと



と呼ばれる紐をさげて持ち運びます。女性がかぶっている大きな帽子には、ターコイズやその他宝石類があしらわれており、代々その数を増やしながら娘へ受け継がれます。女性はウールのジャケットに、ベルトには貝の飾りがついており、動くとき音がするようになっています。腕にはバングルを付け、挨拶の時にかけ合わせ音を鳴らして挨拶をします。男女ともに、背中に金の小さなバッグをさげていますが、これは神聖なものを入れるもので、宗教によって中に入っているものが違うそうです。

音楽はダマンと呼ばれる太鼓、スルナと呼ばれる笛、タンパリンのジングルのようなものが一列に並んだものを叩き合わせるような形の金属製の楽器で演奏され、舞踊に合わせリズムカルな歌が合奏されます。強い太鼓のリズムが腹の底に響き、躍動感あふれる生命の鼓動が伝わる、力強い音楽が印象に残りました。最後は、タシスダンスと呼ばれる集会やお祭りの最後に全ての者の平和と幸福と再会を祈る舞踊で、会場の方も参加しながら賑やかにしめくられました。

(本文・写真：日印協会 主務 玉岡善美)

◆ 新作歌舞伎『極付印度伝 マハーバーラタ戦記』が開幕しました

待望の、10年振りになる新作歌舞伎『極付印度伝 マハーバーラタ戦記』が10月1日(日)に初日を迎えました。

黄金に輝く神々の住む世界。人間の世が混沌を極め滅びの道を歩むとき、破壊の神、シヴァは踊り出す。しかしそこに、太陽神と帝釈天が現れシヴァ神を制する。今一度、人の世に一時の猶予を与えよう。二人の、相を異にする神が遣わす二人の人間は如何にして人の世を救うのか…神が人を翻弄し、人が神を翻弄する。一大スペクタクルが幕を開けました。



主役は、尾上菊之助演じる太陽神と人間である汲手姫（クンティ姫）との間に生まれた迦楼奈（カルナ）。彼は争いの只中へ放り込まれ、己の出自、ダルマ（義務）と使命の間で揺れ動く悲劇の英雄として登場します。対するは、帝釈天と汲手姫との間に生まれた息子、阿龍樹雷（アルジュラ）。平和は力による征服からしか生まれないと確信する彼は、慈愛による争いの調停を使命とする迦楼奈と対立します。物語の中で揺れ動く、高貴な二つの魂。その魂は神の心に触れ、物語の終焉へと観客を導きます。

4 時間にも渡る舞台の中で、観客を一度も飽きさせない陰（ケ）と陽（ハレ）の張りのある見事な演出。異文化を思わせる音楽は不思議と歌舞伎の音楽にもマッチし、美しいバランス感で観客を舞台へ惹き込む力があります。役者一人ひとりの魅力と存在感は、物語の中で一層輝きを見せます。自らの正義と生まれてきた意味を問う主人公の姿は、現代の等身大の私たちのようでもあり、その美しい魂の叫びに共鳴させられます。悪をただの悪として、正義をただの正義として描くのではなく、如何にひとはそこへ辿り着き、自らの命を全うするのか。壮大な演出と物語に飲み込まれ、あれよあれよとその深いメッセージと世界観に抱かれる、そんな素晴らしい舞台でした。印和の見事な融合は何度も、この世界観に浸りたいと思わせてくれます。

この舞台では、原作と一つ大きく違うところがあります。それは、迦楼奈が加担する盲目の王の長子が娘であること。ドゥルヨーダナが鶴妖朶王女（ヅルヨウダ・おうじょ）となり、男性である女形が演じることで、鶴妖朶の大胆さと繊細さを引き立たせ、物語に深みを与えています。

（本文・写真：日印協会 主務 玉岡善美）

◆ ガンディー生誕祭が開催されました

ガンディー生誕 148 年を祝う生誕祭がインド大使館 VCC (Vivekananda Cultural Centre) の主催で 10 月 2 日（月）に行われました。駐日インド大使 スジャン・R・チノイ閣下のご挨拶の後、ディスカバー・インディア・クラブ会長 ラビンダー・マリク氏のご講演されました。後半では、GIIS (Global Indian International School) の学生が小演劇「チャンパラン・サティヤグラハ（非暴力抵抗）」「スワッチタ・セワ（清潔は奉仕なり）」を披露しました。多くの方が参加され、ガンディーの生誕を祝いました。



◆ インディア・メーラー2017が開催されました

西日本最大のインドのお祭り『インディア・メーラー2017』が、10月7日（土）～9日（月）の3日間に渡り神戸メリケンパークにて開催されました。会場は3日間とも天候に恵まれ、知名度も徐々に向上していることもあり、多くの人出を見ることができました。当日は真夏日を思わせる天候で、来場者は飲食テントで涼みながら食事を楽しむ人で溢れていました。初日は在大阪インド総領事から



<写真：ステージでのバラタナティヤムのパフォーマンス>

もアームストロング総領事が参加され、イベントは日に日に盛り上がりを見せました。神戸市内の著名なインドレストランやインド貿易商がブースを出し、大変な賑わいでした。ステージではインド古典舞踏、 Bollywoodダンス、ヨガ、インドフォークダンス、インド音楽など盛り沢山で、司会進行もプロのアナウンサーを配置するなど、きめ細かな演出を楽しむことができました。神戸は古くから日本で商売をしているインドレストランがあり、東京とは違った雰囲気とインドテイストを提供しており、楽しむことができました。

（本文・写真：日印協会 常務理事 笹田勝義）

＝◇ 今後のイベント ◇＝

◆ 展覧会「世界を変える美しい本—インド・タラブックスの挑戦」開催のご案内

ふっくらした手すきの紙にシルクスクリーンの多色印刷、そして製本までもがハンドメイドの美しい絵本が、世界各国から熱い眼差しを集めています。工芸品のような絵本を出版しているのは、南インド・チェンナイの小さな出版社「タラブックス」。1994年の設立以来、絵、テキスト、グラフィックデザイン、そして造本にもこだわりながら、絵本を中心に多数の書籍を出版してきました。

印刷技法や造本の妙に目を奪われがちですが、タラブックスの真髄は、その編集方針にあります。民俗画家たちとの仕事に際しては、インド各地に調査に赴き、画家と出会い、彼らとワークショップを繰り返しながら時間をかけて本づくりに取り組みます。また、日本をはじめ外国のアーティストやデザイナーを積極的に起用し、インドの社会問題や商業美術も取り上げるなど、既存概念を超えた挑戦を続けています。

本展では、日本でもよく知られる『夜の木』『水の生きもの』を含む民俗画家たちとの本作りやハンドメイド本を中心に、タラブックスの出版活動を、絵本・原画・写真・映像など約300点の資料とともに紹介します。



<開催詳細>

場 所：板橋区立美術館 東京都板橋区赤塚 5-34-27

都営三田線「西高島平駅」下車 徒歩 13分 *バスでもアクセス可能です。

開催 期間：2017年11月25日(土)～2018年1月8日(祝月) 開館：9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日：月曜休館 (但し1月8日は祝日のため開館)、12月29日～1月3日

観 覧 料：一般650円、高校・大学生450円、小・中学生200円

*土曜日は、小中高校生は無料で観覧できます *20名以上団体・65歳以上・障がい者割引あり (要 証明書)

主催：板橋区立美術館 / 企画協力：Tara Books、ブルーシープ 日印友好交流年記念事業

＝◇お知らせ◇＝

◆ インド人留学生への給付型奨学金 平成30年度「T. パナージインド留学生奨学金」の募集

公益財団法人日本国際教育支援協会(JEES)で実施している冠奨学金の平成30年度「T. パナージインド留学生奨学金」の募集が開始されました。本奨学金は、インドと日本の架け橋になることを志すインド人留学生を経済面で支援し、日印間の相互理解と友好親善に寄与する人材を育成することを目的として、平成29年度より3名の私費留学生を支援しています。

奨学金概要は下記の通りとなります。平成30年度は、日本語能力についての応募条件が変更になりましたので、ご確認ください。

<平成30年度「T. パナージインド留学生奨学金」概要 >

寄付者：早川芳子氏

対 象：日本国内の大学の学部・大学院に正規生として在籍するインド国籍の私費留学生。

日本語能力試験N3以上を取得している者。

その他、募集・推薦要項の応募資格を満たす者。

採用人数：3名程度

支給内容：月額10万円の返済不要な奨学金を、支給開始年度より在籍する課程の標準修業年限まで支給。

なお、応募はJEESが選定した大学から推薦を受けた学生に限られます。JEESへの応募締切は、平成29年11月末となっていますので、応募については、在籍大学の奨学金担当係に推薦が可能かお問合せください。

問い合わせ先：公益財団法人日本国際教育支援協会 事業部 国際交流課 TEL：03-5454-5274

5. 新刊書紹介 Books Review

§ 『現代インド・フォーラム』2017年秋季号 No. 35

日印協会会員の皆様に10月2日にメール配信致しました。
協会HPでは10月10日に公開されました。

次のURLにてご覧いただけます。 <http://www.japan-india.com/forum>

今号では、“インドをめぐる連結性(コネクティビティ)”を特集しました。

<目次>

1. 南アジアのコネクティビティをめぐる印中のせめぎ合い
—最近のトレンドを中心に—
堀本武功 (国際政治学者)
2. 中国の「一带一路」構想における CPEC とインド
三船恵美 (駒澤大学法学部 教授)
3. 失われたコネクティビティを求めて —インド・バングラデシュ関係—
村山真弓 (JETRO・アジア経済研究所 研究支援部長)



§ 『アジアの道案内 南インド—ひよっこダンサー、はじめの一步—』

著者：井生 明 (文・写真)

発行：玉川大学出版部

定価：本体2,500円+税 ISBN 978-4-472-05998-8

タミル・ナードゥ州のチェンナイに住む12歳のニヴェダ。彼女の踊りのデビュー公演を通して南インドの暮らしを知ることができます。4歳からインド古典舞踊、バラタナティヤムを習うニヴェダは、公演の準備で大忙し。家族や先生、友達に支えられながら初公演に挑みます。彼女の住む土地や文化が、彼女を通して見えてくる。写真やイラストも多く使われており、絵本のような感覚で読むことができる、異文化教育にも役立つ一冊です！



6. 掲示板 Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は、**2017年11月17日(金)**を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<編集後記>

秋も本番。銀杏の香りが鼻をつくこの頃ですが、秋といえば食欲の秋。美味しいものは文化を超え人々を繋ぎます。28歳のムナフ・カバディアは、誰もが憧れるテクノロジー企業である Google を辞職し、自宅で期間限定のポップアップ・レストランをオープンしました。このレストランの主任シェフを務めるのは彼の実の母。自宅で営業するレストランには、彼女のお母さんに対する思いやりとアイデアが溢れています。お母さんと一緒にテレビを見ていたムナフさんは、彼女がくだらない連続ドラマで大切な時間をつぶしている事に気が付きました。そしてムナフさんは、お母さんが料理する Bohri というインド、パキスタンにまたがるイスラーム教徒のコミュニティ間でしか食されない、珍しい郷土料理に目を付けます。「コミュニティのメンバーか、招待されない限り食べる事のできない、貴重でこんなにおいしい料理をムンバイで提供したら…」と思いつき、試しに自宅でレストランを開きました。レストランは大盛況。日中にはお弁当のサービスを始め、これからインド全土でチェーン展開を計画しています。インドには、こうした「母の味」として表に出てこない美味が多く存在すると考えられます。そして遠く海を渡り、日本に住む編集子の自宅には12のスパイスが常備されています。編集子が料理するインド料理はたかが知れていますが、これだけの組み合わせがあれば料理の幅は無限大であるはず。まだまだ知らないスパイスが存在することを考えると、インド文化の奥深さ、そしてこれらを毎日駆使するインドの母の偉大さを感じながら、スパイスとにらみ合う日々です。 (玉岡 善美)



インドのスパイスマーケット

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。



入会随時受付中



日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の3名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費 個人	1口(8,000円)から	☆入会金 個人	2,000円
学生	1口(4,000円)から	学生	1,000円
一般法人会員	1口(100,000円)から	法人	5,000円
特別法人会員	1口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)



月刊インド Vol.114 No.8(2017年10月20日発行) 発行者 平林博 編集者 西本 達生
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <http://www.japan-india.com/>